

# 地域教育の推進と地域力活性化コンファレンス



実行委員会代表 讃岐 幸治

## 1 今、なぜ地域教育実践交流集会か

### 1) 交流集会のねらい

「家庭なき家族」、「地域なき学校」、「コミュニティなき地域」が増加するなかで、家庭崩壊、子ども虐待、不登校、校内暴力、孤独死、無縁化など、さまざまな異変が起こっている。このままでは危ない、将来が不安だ。こんな危機意識から生まれたのが「地域教育実践交流集会」である。

これからは「地域に学ぶ教育、地域で育む教育、地域を創る教育」が必要だ。各地で、地域教育に孤軍奮闘している人たちが、一堂に会し、それぞれの思いや経験をぶっつけあい、ロマンを語り合い、元気を分かち合う。地域や年齢や職業はいうまでもなく、活動のジャンルも越えて、この指とまれ方式で、自主的に集う、そんな手弁当、手づくりの集会である。

この集いが、互に経験や知恵を出し合い磨きあう「響育」の場に、団体・機関などの壁を乗り越えて、協働して取り組む「協育」のノウハウを身につける機会に、さらには郷土そのものが薫育を行う「郷育」づくりのきっかけになれば、と願っている。いや「人儲け」の会になれば、それでもいい。

ただ今回は、文部科学省の協力をえて、全国各地から、ユニークな実践をされている方々に、数多く参加してもらっている。「朋あり、遠方より来る、また楽しからずや。」これまで以上に厚みと広がりのある集会になるよう。みんなで盛り上げていきたい。

以上の文章は、「地域教育実践交流集会 2015 第8回大会 かかわりをチカラに つながりをつかち」のプログラムに挨拶として書いたものである。

### 2) 交流集会の運営の仕方

今、子どもたちが危ない、地域が壊れている。それぞれの地域で、子どもや地域に危機感を抱き、少しでも何とかしようと、あがき、苦しみながらも孤軍奮闘している。そんな実践家が数多くいるはずだ。そういう人たちが一堂に会して、実践を語り合い、元気をわかちあう場があったら、何か得るものが生まれてくるのではないか。子どもを何とかしたい、地域を立て直したい、そういう人たちが集う集会として開くことにした。それが「地域教育実践交流集会」である。

集会の運営にあたって心がけたことは「手間」、「居間」、「仲間」、「世間」であり、それをつくり

だす集會にしようとしたことである。

第一は効率とか形式とかでなく、じっくりと「手間」をかけて語り合える集會にすることにした。手間賃ではないが、参加者から参加料をとる。手弁当主義である。分散会は 4 時間かける。失敗の事例、悩みなどトコトン本音をぶつけ合う。だれもが「主役」として発言せざるを得ない、自信と誇りを持ち合える集會をめざした。

もう一つは、だれもが自由気ままに気軽に集えると「居間」のような集會にすることにした。PTA、学校、NPO、青少年健全育成会、公民館など、さまざまな組織や団体、機関などがあるが、それぞれの枠のなかに閉じこもっている。福祉の関係者と学校関係者が一緒に論議する会などほとんどない。それぞれの壁があつい。ここでは組織や団体、年齢や地域、行政の枠を超えて、「ヨコ」につながりあい、だれもが気軽に集い、自由に情報交換し、悩みを出し合い、元気をもらいあう、そんな「居間」のように居心地のいい集會をめざした。

三つ目には、人儲けの会になるよう努めた。同志ともいうべき「仲間」ができるように、15 分散会に小分けして、それぞれの人数を 15 人程度とし、「ミニ」規模の集りとした。さらに分散会への参加は、いろいろな人と出会えるように、クジ引きで決めていった。また活動のジャンルや地域、年齢や組織などを越えて、いろいろな人に出会えるように、歓迎ワークショップや名刺交換会、交流会など工夫をこらした。

最後に「世間」づくりである。特定のメンバー同士で活動していると、自分らだけに通じる論理や文化、規範にそまって、「世間」知らずになりやすい。いろいろなやり方、考え方があるはずだ。それぞれの活動のよさに磨きをかけ、問題点に気づき、修正していくためには、他流試合が必要だ。また、梁山泊のように、新たな世間「パブリック」づくりをめざして集う同志の拠点になれるように仕向けてきた。

### 3) 「学びを通じた地方創生コンファレンス」事業との関係

以上のことを念頭に置きながら、手弁当方式で、地域教育実践交流集會を開催してきた。これまで 7 回やってきた。やっと、それなりに認知度も高まり、県内だけでなく県外からも数多く参加してくれるようになった。実践者の人たちにとって一大イベントとして期待されるまでに育ってきた。これまでのやり方で後 3 回開催したら、10 回開催したことになる。区切りもいいし、社会的な使命は果たしたことになる。晴れて、解散。そう思ったりもしていた。

ところで、今年の 8 回大会を開催するに当たって、実行委員会において、あるメンバーから文部科学省の「学びによる地域力活性化プログラム普及・啓発事業」の委託を受けたらどうか、との提案がある。いろいろな意見が飛び交った。これまで民間主導で、手弁当で、作り上げてきた集會、それなりに定着している。それが、委託を受けることによって、依存的で、形式的な集會になってしまうのではないかと、などなど。あれこれやり取りされたが、最終的には委託を受けることになった。

問題は 8 回大会をこれまでの大会と違うものにするかどうか。最終的な結論として、「学びによる地域力活性化プログラム普及・啓発事業」の委託を受け入れたからといって、これまで実施してきた「地域教育実践交流集會」のやり方は踏襲することにした。基本的にはこれまでのやり方と全く変わらないやり方で開催する。つまり、地域教育実践交流集會を特色づけてきた手間、居間、仲間、

世間づくりの方向は堅持していく。それどころか、委託を受けることで、その方向性を強化していくことにしたのである。

どうして、これまでの地域教育実践交流集会のやり方にこだわったのか。それは手間、居間、仲間、世間づくりという運営の仕方を通して、地域づくりに必要な資質・能力を培っていかうとしてきたからである。それこそが交流集会の意義であり、目玉とするものだったから。

なぜ、そうなのか。これに応えるためには、地域社会がどう変わってきたのか、いま地域社会がどうなっているのか、それを立て直すのにはどうしたらいいのか、その点を簡単に見ていくことにする。

## 2 地域社会の変遷と地域教育

### 1) 終戦から 1955 年——地縁に基づく地域共同体——

終戦から 55 年まで、焼け野が原になった国民国家の再建に入りかかっていた復興期とっていい。食べるものもとてなかった。住民が力を合わせて助け合い生産力を高めていく以外、生きていけなかった。「生産共同体」だった。だれもが地域から離れて生活していくことは困難だった。「運命共同体」だった。また、道路の整備、防犯、葬儀なども、みんなが助け合いながら行っていかなければならなかった。互いに顔見知りの「生活共同体」だった。「自分だけよければいい」と考えて利己的に振舞っていたら、共倒れになる時代だった。

寺中作雄の公民館構想にみるように、公民館は地域の課題を地域の住民が力を合わせて解決していく拠点であった。また学校にしても、「崩れた社会を再建するための最も基本的で、最も希望の持てる足がかり」として扱われ、明日の豊かで平和な地域を担う人材を育成する場として、「おらが地域のもの」だった。

### 2) 1955 年から 1970 年——職縁に基づく会社共同体——

56 年の『国民生活白書』に「もはや戦後ではない」と書かれ、このときから経済の高度成長期に突入する。60 年に所得倍増論の発表。64 年に東海道新幹線開通。オリンピック開催。工業化がすすみ、人口の地域間大移動がはじまる。それにともなって、地域社会が崩れていった。

都市に働き口を求めて、地方の若者が大量に移り住みはじめる。見知らぬ新しい土地での暮らし。「夫は仕事、妻は家事で豊かな生活を築く」ことをモットーに、個々の家族は自分たちの生活だけをみつめて、同じ建物や団地に住みながらも、人と人、家族と家族の交流と連帯はなくなり、人びとは「マイホーム主義」にはしっていた。地域はネグラとしての家が点在するだけの土地で、「コミュニティなき地域」になっていった。地域の空洞化である。

地域に代わって台頭してきたのが社縁を基盤とする「会社共同体」だった。会社主催のレクリエーション大会、親子運動会、さらには冠婚葬祭までも会社が面倒をみる、会社共同体だった。地域とのつながりよりも、会社とのかかわりが重視されはじめた。地域は単なる通勤や通学道路でしかなかった。

他方、地方にあっても共同体としての地域は崩壊。大量の若者の流出、それに続く出稼ぎ、挙家離村による人口減によって共同作業は困難になった。73 年現在で全国市町村数の約 3 分の 1 が過疎地。

各集落の伝統的な生産・生活機能の喪失。道普請や防災活動などの共同作業も金銭で済ますなど、意識の打算化、利害的意識化がすすんできた。祭りなどの地域行事・しきたり・風習なども衰退・消滅し、地域の個性・特性が消えてきた。学校にしても、公共社会のためよりも個人の利益を増大させるための機関として、受験地獄が激化し、地域離れを一段と進めていった。

### 3) 1970年から1990年まで———関心や志に基づく共同体———

経済の高度成長は1973年の第一次オイルショックまでつづくが、その弊害ともいえるべき大気汚染、水質汚染、自然破壊などの公害が65～74年の間に激化、これらの問題を解決しようとする「市民運動」が全国的に展開してくる。

他方、1979年(昭和54年)に大分県の平松守彦知事による「一村一品運動」の提唱。各地で衰退した地域を何とかしようと、村おこし、まちづくりなど、地域の活性化をもとめて、住民主体のまちづくり運動が盛んになっていた。

また生活が豊かになったことで、価値観や生き方の多様化・高度化が進むなかで、同じような趣味・関心、同じような志や願いを持ったもの同士のつながりを基盤にした新たな共同体が数多く生まれはじめた。バッハ合唱団、俳句の会、子ども育成会、まちづくり同好会など、さまざまな同好会・サークル・NPOなどが生まれてきた。

市民運動やまちづくり活動、あるいはNPOなど「関心や志を基盤とする共同体」が生まれてきたが、地域を基盤とする地域共同体は崩れ、地域課題の解決は行政任せで、地域社会としての自治能力はなくなっていった。

69年には国民生活審議会調査部会コミュニティ問題小委員会報告書「コミュニティ———生活の場における人間性の回復」、71年に中央教育審議会答申「生涯教育について」が出される。コミュニティ・センターの設置や公民館施設のデラックス化がはかられたが、地域住民の私事化、孤立化、依存化の傾向に歯止めがかかるものとはならなかった。公民館を趣味・教養など私的個人的な生涯学習の場として活用するだけでなく、地域によっては公民館を拠点に住民が主役となって「生涯学習のまちづくり」をすすめていた。

### 4) 1990年から現在———無縁化してきた地域———

1990年代から、われわれを取り巻く社会は大きく変わってきた。91年のバブル崩壊、つづいて97年の金融危機。企業倒産、リストラ、そして終身雇用制度の崩壊である。職縁を基盤とする「会社共同体」までも崩れはじめたのである。

経済的には、実質GNP成長率が、96年の3.4%、97年の1.7%から、98年にはマイナス1.1%となり、「98年大不況」の年といわれる。この98年の大不況をきっかけとして、社会自体が不安定化してきた。

さらに「1998年問題」といわれるように、その年に家庭崩壊、離婚率、校内暴力、不登校、孤独死や引きこもり、フリーター、自殺者などが突然急増し、そこで高止まり、社会の不安定化がすすんでいる。この年を節目に、希望なき社会とか無目標社会とか、格差社会とか断絶社会とか、無縁化社会とか匿名社会とか、あるいは無気力社会とかマイナス自己肯定感社会とか、何か「構造的な変化」が生じたように思える。

社会から「世間」がなくなり、やりたい放題の無秩序、アノミー状態。人間は多いが軽いタッチのつきあいしかなくなり、心から語り合える「仲間」もいなくなった。持て余すほどの広々とした空間はあるが、心の落ち着く居心地のいい「居間」がない。つねに速く、速くと、急き立てられ、秒単位、分単位に時間はコマ切れ化され、ゆったり「手間」をかけて取り組むこともなくなった。生きているというよりも、せき立てられているという状態。おかしくなったものだ。

### 3 地域コミュニティづくりと地域教育実践交流集会

#### 1) 地域力の醸成とソーシャル・キャピタルの蓄積

1995年 阪神淡路大震災が起こった。関西地区の被災者は約35,000人だったが、行政だけでは救助活動が間に合わず、被災者のうち27,000人は、市民自身の手で救助。この活動を通して、地域課題の解決において行政のみでなく市民をはじめ地域の力が必要だとの認識が広まった。

どこの地域においても、防災だけでなく、防犯、福祉、環境、教育など、あらゆる領域で、さまざまな課題が噴出しているが、行政だけで対応しきれなくなっていた。一つには行政の財政不足、二つには行政は画一的で、それぞれの地域にあったきめ細かい対応は出来ず、行政には限界があった。

そうしたなか、この震災をキッカケに「地域力」という概念が生まれたのである。地域の課題や魅力について、地域の構成員が目標を共有し、その目標を達成するために、それぞれが主体的=自立的にかつ協働して解決・創造していく。つまり地域の課題を解決し、または地域の価値を高めていくためには、地域の構成員が問題解決力や協働力、自治能力を身につけていくことが大事だという考えが広まってきたのである。

2011年に東日本大震災が起こった。そこで注目されたのが「社会関係資本」(social capital)であった。これまで地域の結びつきがもっていた相互扶助性(互酬性)と相互信頼の規範、われわれ感情、「絆」や「結びつき」の重要性が見直されることになった。人はひとりでは生きられない。さまざまな人たちとの間に多くの関係を結び、相互に助け合って生きていかなければならない。生きていく上で、さまざまな水準での共同性を求め、相互扶助や相互信頼の関係を構築していく必要があるとの考え方が広まってきた。

「地域力」の醸成と「社会関係資本」の蓄積が大事である。前者の「地域課題解決力」ためには後者の「人間関係力」が必要だし、後者を培っていくためには地域課題の解決のために協働していく試みを積み重ねていくことを通して、人間関係を深化させていく必要がある。両者が必要だということが明らかになったのである。これは機能集団と共同体の関係ともいえるが、この点については別の機会にゆずることにしたい。

#### 2) 「子育て共同体づくり」の経験から

新興住宅団地の自治公民館長をやったことがある。1977年頃で、しかも地縁関係もない新興団地で、住民の意識・行動は受動的で、私事的で、バラバラであった。それを能動化、公共化、連帯化していくために、みんなで打ち出したスローガンが「子育て共同体」の建設だった。住民の多くが関心していたのが「子育て」だったこともあり、それを地域の共通テーマとして設定したわけであ

る。「地縁」の代わり「子縁」によるコミュニティの形成をめざした。

この「子育て共同体づくり」は、バラバラだった住民が共通して取り組む目標に向けて、その目標を達成するためにそれぞれの住民が力を出し合っていく協働の過程だったし、その過程を通して住民は相互信頼の関係を深め、また各人の自信と地域への愛着を深めていく過程でもあった。つまり地域力の向上とソーシャル・キャピタルの蓄積のプロセスであったのである。

「子育て共同体づくり」のプロセスを、もう少し詳しく述べてみる。

- ア) 地域として共通に取り組む課題・目標を見つけ出し、それを達成していくための方法や具体的な手順を導き出していく過程。
- イ) 設定した目標・課題を実際に達成・解決するために、住民それぞれが持ち味や特技、経験を出し合い、連携協働していく過程。
- ウ) 見知らぬ住民であったものが、各種の行事やさまざまな交流を通して、それぞれの立場を理解しあい、信頼関係が築いていく過程。
- エ) 地域課題を住民が力を合わせて取り組んでいくなかで、やれるという自信とそうした自分らの地域に誇りと愛着を産み出す過程といえる。

以上のように、「子育て共同体づくり」という地域づくりは、地域の人びとが「構想力」、「組織力」、「連帯力」、「自立力」を培っていく過程であり、住民一人ひとりとしては「挑戦」、「協働」、「信頼」、「自信」を高め・深めていく過程であったといえる。

### 3) 「子育て共同体づくり」における公民館の役割

「子育て共同体づくり」は、住民が共通して取り組む目標を設定し、その目標達成の為に主体的に取り組んでいく活動であり、解決するために個々人がそれぞれの持ち味を協働して出し合っていく活動であり、相互に認め高めあい、だれもが仲間になっていく活動であり、一人ひとりがそれぞれの資質・能力を引き出し自信と誇りをもつていく活動であったのである。

公民館としては、それらの活動がスムーズにいくように、次のように提示してみた。

- (1) 課題所在や解決方向を探り、地域づくりの方向を提示し、地域価値を創造するために、ナミゲーター的な役割・機能をもつ。
- (2) 地域の構成員が自立的かつ組織的に協働して取り組めるように各人の出番をつくるエディター的な役割・機能をもつ。
- (3) 構成員相互が「われわれ感情」、相互信頼・相互扶助をもつように引き合わせるコーディネー的な役割・機能をもつ。
- (4) 課題意識の醸成し、自信や誇りをもたせ、地域愛などを奮い立たせ、元気づけるファシリテーター的な役割・機能が必要とされた。

### 4) 地域教育実践交流集会への参加で何を得たか。

地域コミュニティづくりには、地域課題を解決する、地域価値を創造する「つくる」、それぞれが協働していくために「つなぐ」、信頼関係をつくりあげるために「つどう」、課題意識への意欲や誇りを「つちかう」役割・機能が必要だが、それらをどうしたら身につけることができるだろうか。

地域教育実践交流集会への参加者は、その「世間」、「手間」、「仲間」、「居間」づくりを基調に運

営されている集会に入り込むなかで、部分的かも知れないが、地域コミュニティづくりに必要な「つくる」「つなぐ」「つどう」「つちかう」役割・機能をおぼろげながら体得していったのではないか。

詳しくは参加者の感想に譲るが、新たな世直しの動き、さまざまな広い「世間」の動きやユニークな活動に触れ、どういう方向をめざしてうごけばいいか、「構想力」を身につけ、「挑戦」してみようとの意欲をもったのではないか。多くのものが「来たかい」があったとの声に一安心している。

また、十分に「手間」をかけて論議でき、だれもが自分の持ち味を発揮し、意見を十分に述べることができた。それぞれが活躍でき「やりがい」があったという。多くのものが活躍できる出番が数多くあり、それぞれの持ち味を知りあえ、自然に相互に「つながり」をもてるようになった。そうした「協働」のさせ方、「組織力」を感じてもらえただろうか。

さらに「仲間」づくりの機会として、少人数による分散会はいいうまでもなく、集会そのものが全体としてアットホームな雰囲気で行われたことで、「信頼」関係を築きあえ、だれもが居心地のいい「居るがい」のある「つどえる」場所だったといっている。

さらに「学びがい」のある実践が数多く、知的好奇心がゆさぶられ、元気づけられたという。この集会を別名参加者の自慢大会といっているように、それぞれが「自信と誇り」を持ってもらえればいい。そんな意欲や資質・能力を「つちかう」会に少しでもなっていたら、いうことなしだ。

参加者がそれぞれの地に帰り、実践を深め、また来年度いい実践を持ち寄ってくることを楽しみにしている。

